

# 豊田 芙雄

安 省 三



## 生いたち

豊田芙雄先生は弘化二年（一八四五）十月二十一日水戸市楓小路（現在新莊町）桑原治兵衛の五女として生まれ、名を冬子といいました。父は水戸藩の学者で殊に義に強い人でした。当時水戸藩は誠に悲惨というか藩主烈公の藩政改革が幕府から嫌疑をうけ、弘化元年五月、冬子の生まれる前から藩主は謹慎、家老以下重臣たちも幽囚または謹慎、父も屋敷はとりあげられ、後には蟄居の身となり、間もなく仲町の牢に幽囚されました。冬子は楓小路のわび住居に日蔭者としての生活を送りました。

冬子の母は藤田東湖の妹で、世にすぐれた賢婦人であります。東湖の妹だけに書にすぐれ、和歌に秀で、和漢の書に通じ、きびしい生活態度の人でありました。冬子はすぐれた学

者の血をうけ、すぐれた環境につつまれ、母のきびしい教育的なしつけを受けて育ちました。

冬子は生まれつき読書が好きであつたし、四歳頃から大書、中庸、論語など父から素読を学び、孟子などひとり読みをしました。経書、日本外史、太平記など殊に興味をもち、漢書、史記、古事記、日本書紀はいうまでもなく、古今集などそらんじたという強記の人で、後の話であります。古今集は何回位読みましたかとの質問に、千べん位ですか、と述べていることから努力の人ということがわかります。

母のきびしいしつけによつて、冬子は言葉が正しく、礼儀作法の厳正なことなどいふまでもありません。然し母は安政三年八月冬子十二歳の時に死し、父は文久二年十月冬子十七歳の時に死にました。

## 豊田小太郎に嫁す

冬子は父母の死後、文久三年六月二十八日十八歳で豊田小太郎と結婚しました。小太郎とのかかわりにおいて、冬子の識見は一層の輝きをますことになりました。冬子の名を英雄と改めたのもこの時であります。小太郎の人物また偉大といわねばなりません。

小太郎は大日本史の中で最も困難とされた日本の文化史、志類を書いた有名な学者豊田天功の長男であります。小太郎も父の志を受け、志類職官志を三十三歳で完成しています。水戸弘道館で国学漢学を学び、藩から抜てきされて蘭学を修め、二十二歳の頃には日本国中でも名が高まり、他藩から小太郎のもとに勉学に来る者も多かったのであります。安政二年床几廻りから洋学世話係となり、弘道館で蘭学教師となっています。氣力たくましく実践力が強く、性活潑で、己の信ずることは必ず行なうという氣慨をもち、世を導くためには、己を捨てて事に当たるといふ強固な意志の持ち主でありました。計画は致密で思想的には進歩主義者でありました。藤田東湖の後、水戸藩を背負うもの小太郎であると藩内で称揚された人物であります。小太郎には、父の志である大日本

史志類の完成という重大使命がありました。三十一歳で彰考館総裁代役となり三十三歳で志類職官志を完成しました。

この頃水戸城内では佐幕党が勢を増し、藩内は騒然となり、凄惨な同志討ちが続きました。小太郎はこれを憂え、英雄の兄方太郎と協議、水戸藩の鎮静回復を計ったが果たすことはできませんでした。小太郎の著述『変通論』に明かなように、攘夷論に対する反対意見の主張で、外国文化の長じたものを取り入れ、日本文化の向上をはかるべきである、攘夷はとるべきでないという考え方であります。しかも攘夷論の最もはげしい水戸の地においてであります。この進歩主義に英雄の進歩主義が醸成され、大きく育っていったことはいくまでもありません。英雄の生涯が大きく炎となつて燃え続けたのは、小太郎の思想にもとづくもので、小太郎との四年間の生活の中に、生まれ変わった英雄の思想がうかがわれます。

## 維新の騒乱

小太郎は開港論への機運打開のため奔走を企てました。慶応二年六月、水戸藩を脱出して京都に上りました。この事は水戸の攘夷党からにくまれたことは当然であります。翌年九月二日には京都の堀川で刺客のために命を落しました。時に

小太郎三十三歳でした。

英雄が小太郎に嫁したころ、義父天功は大本史志類食貨志の執筆中で、昼も夜も手を休めなかったし、夫小太郎も志類職官志の執筆中であつたから、英雄も余暇はすべて読書にふけるという学者の妻らしい幸福な生活が続きました。この平和な生活は何日続いたでしょうか。元治元年正月には義父天功は食貨志の執筆中に死し、三月には親戚の藤田小四郎が攘夷実行を期して筑波の挙兵となり、夫小太郎は藩状回復のため京都に上るし、八月には水戸藩は天狗、諸生の二派に分かれて騒乱の場所となりました。水戸藩主慶篤は京都の守護職であつたため、名代として宍戸藩主大炊頭が水戸城鎮庄に来ました。これに執政武田耕雲斎と藤田小四郎の軍が加わり、水戸城内にあつた市川、朝比奈郎等と幕府軍が拒んだので、水戸城攻撃という維新の騒乱が起きました。この時、英雄先生の家は戦禍をのがれ転々とするうち、経済的にも困り悲惨な生活のうちに、姑も小太郎の弟も同時に死すというみじめな生活が続きました。信頼しきっていた小太郎からは、京都に上ってから幾月たつても音信はありませんでした。音信ないのも道理、夫は刺客に殺されていました。日ごと夜ごとに恐ろしい世相を思いうかべて生活するうち、小太郎の弟

朋来も死し、翌年には末弟半之介が死し、小太郎の生死も知らされぬまま、豊田家に残るものは英雄先生只一人となつてしまいました。この有為転変の不幸に、どんな気丈な者でも泣くに涙の出ない有様でした。

明けて明治元年と年号が改まり、王政は復古し、家を出ている志士たちが次々と帰ってくる中に、夫小太郎は遂に帰らなかつたのです。刀一振と胸乱一個と共に夫の死を知らされた英雄先生は、覚悟はしていたものの亡然自失、全く孤独となつてしまつたのでした。二十三歳の妙齢で生きる希望を失い、生きるべきか死すべきかに迷ひ通す幾日かがすぎました。英雄先生の偉大さはこうした境遇の中で育つていきました。淋しさに堪えるということは、その耐える心がたくましく育つていったと思います。幾度か死を決し、孤独の寂しい生活に耐えぬいた時、奔流のようにわき出たものは、信頼する夫小太郎が家を出る時残した言葉でありました。国を発展させるためには、進んだ外国文化を取り求めることだ、この考え方を生かすためには、どんな苦しみにも耐えて生きぬかねばならない。若し中途にして命を落すことがあつても、英雄は生きぬかねばならぬぞ、自らの力で強く生きぬけ、と残された小太郎の言葉が英雄先生の胸に強くよみがえつたので

した。小太郎の報国の念に燃えた生き方に、英雄先生の魂は動かされました。以来英雄先生の心に火がつき、大きな炎となって燃えあがったのであります。夫の生き方を継ぐことが妻としての生きる道ではあるまいかと、闇夜に光を得た境地になって勇猛心が湧き出し、以来英雄先生の生涯をつらぬき通す志が立ったのです。英雄の名にふさわしく雄々しくかおり高い女としての生き方が冴え渡っていったのであります。

### 待つ人帰らず、剣を懷に勉強

明治元年も暮せまるころ、今の栄町川崎殿の漢学塾に通いはじめました。栄町といえ今は繁華街であります。當時は向井町片町といって神崎から続く水戸城の外濠で、草木繁茂し、深い濠が屈曲して昼さえ一人歩きを恐れられた地であります。まして幕末乱世の時、若い女の一人歩きは難事でありました。先生は懷には剣をたばさみ、音の立たぬようぞうりをはき、ちょうちんを持たず、五軒町の桑原家からぬけ出して夜道をここにかよったのであります。この勉強は三年あまり続きました。英雄先生の気丈さ、たゆみない努力に驚きます。先生は薙刀において免許師範の所持者であります。

再婚を勧められたことも何度かありましたが、夫の志を継

ぐという信念が生涯これを拒み、貞節を安住の地とし、学者という学者を尋ねて自己研さんにつとめました。世が改まるにつれて福沢諭吉の西洋事情、学問のすすめなど借りよみするなど、當時として文明の先端を進むことを怠らなかつたのであります。英雄先生が後に女子開放論をのべ、進歩主義を主張するに至ったものは、小太郎の思想にもとづくものであり、その思想を裏づけるものは福沢諭吉の学問のすすめ等に深く共鳴したと『述懐』にのべています。

明治も三年となり、ようやく世も定まり、英雄先生は近所の子女に和漢の初学を教えはじめました。先生は髪を切つて学者となり夫の志を完成すべきか、教育者となつて教育報国を己の道とすべきかを思い悩んだ結果であります。英雄先生は学問において人後にはおかない。先生の偉大さは学識でなく、たくましい不屈の精神力と、苦闘の生活によつて得られた崇高な教育精神であります。英雄先生が教えはじめたこの地は、母雪子もかつて教えたことのあるゆかりの地であるし、英雄先生をしたつて集まるものも多く、子弟は室に満ちあふれるようになりました。経済的な援助をする人があつて、明治五年学制公布の年、豊田家の屋敷跡に発校女学校という学校創設に努力し、その教師となりました。私塾のかた

ちではありませんが、女学校という名のついたのは全国でも早く、女子教育の先駆者というべきであります。英雄先生が東京女子師範学校に迎えられた後、まもなくこの地に五軒小学校が建ちました。

### 保育手記

英雄先生が東京女子師範学校附属幼稚園在任中の折に書かれたものに『保育の栞』『恩物大意』がありますが、当時は恩物本位の教育でありましたから、これらの記録は生半紙にまことに丹念に書かれたもので、英雄先生の人柄がしのばれ、先生の生命が躍動しています。また鹿児島幼稚園開設について自ら書いた『設計書』『教育口授代紳録』が残っています。代紳録は保姆練習生や、母親等に講演した原稿などで、英雄先生の教育思想がしのばれるものであります。

先生が晩年になって書かれた『述懐』によって二、三保育の思い出をのべてみますと、恩物（手技）の色紙に苦心されました。当時洋紙の製法が十分でなく、美しさを重視する色紙がない。そこで美濃紙に染色させたが思うようにはできない、失敗と苦心を重ねて素晴らしいものにつくりあげたこと、また恩物（玩具）の長さ、インチを寸に改めて作りなおした

苦心と、恩物を取扱いながら長さの観念を教えることに注意したとのことであります。

恩物より先生は唱歌遊戯に苦心がありました。考えてみても、音楽の性質上、保育理論や音楽の指導法はあっても、楽器がない、歌詞がない、楽譜がない。そこで保姆たちで創作しなければならなかったのです。英雄先生は、万葉集、古今集、拾遺集などをもとに歌詞の創作をしました。作曲は宮内省の伶人（楽人）などの作曲で、調子は『てふてふ』（蝶々）のように優雅なものとなりました。楽器がないから、口うつしと手拍子で調子をとりました。殊に注目すべきことは、唱歌と遊戯を結合させ、幼児の活動性を増長せしめるという創作的なものが生かされていることであります。

いへばとの すのこひらきて はなちやる

ゆくへやいづこ 山に野に しば生の原に あそぶらん

あそびてあらば かへらん とくかへらん

かへらずば すのことちてん すのことちてん

この家鳩の唱歌遊戯は、円陣を作って、中に数人の幼児が鳩になって入り、すのこひらきての歌で円陣を少し開き、はなちやるで幼児の鳩が出る。幼児の鳩が山に野に、しばふの原にあそぶ、あそんでからすのこの円陣の中に帰る遊戯で、

明治十年に作られて保育実践につかわれています。このことは大阪市愛珠幼稚園に残る資料によって明らかであります。

当時は文明開化の気風が強く、新しさを求める時代であっただけに、社会から目を引き尊重され、婦人の講演会などには英雄先生の講演がいつも行なわれたのであります。

### その後

明治十二年一月鹿児島師範学校の附属幼稚園設立のため招かれ、ここで約一年半、多くの業績を残して帰りました。帰ってからは東京女子師範学校の読書教員をつとめ、明治二十年徳川篤敬が伊太利公使となってローマに行く時、随行を依頼されました。文部省から欧州女子教育事情調べの命を受けています。以来三年間西欧各地で、西欧の女子教育事情を調べ、帰国後、英雄先生の理想的教育にもとづく女子教育の学校「翠芳学舎」を財政援助者があって、数寄屋橋ぎわに開校しました。日本における私学発生の黎明となり、数多くの女流教育者と共に活躍しました。

その後複雑な事情があつて、宇都宮高等女学校の再建に招かれ多大の功績をのこしましたが、家庭事情等により郷里水戸に帰り、水戸に高等女学校を創立することに尽しました。

英雄先生は己にきびしく、厳正な生活態度で生涯を貫きました。然し先生の生涯の中に只一つ心のとけないものがありました。それは国を思う赤誠心によって活躍し、京都堀川で刺客にたおされた夫小太郎が、いつになっても国から認められないことでありました。英雄先生の胸に秘められた小太郎への思慕は、生涯続いたものであります。明治九年三月、水戸勤王殉難志士忠魂塔除幕式が行なわれたとき、英雄先生もその席に列席しました。しかし先生が思慕し続けた夫小太郎の名はこの碑に見あたらなかったのです。

「わが背子のみ霊何方に迷う覧 此の人数に入らぬを思へば」  
せつせつたる先生の心情は察しても余りあります。生涯を心のよりどころとして生きてきた先生の心情、胸に秘めて離れなかった偉大な夫への思慕、然し大正十三年一月天皇御成婚の慶典が行なわれた時に御贈位がありました。このとき亡夫の赤誠はじめて天に通じたと、皇恩に深く感泣しました。生涯を夫小太郎の形見にかしずき、心のよりどころとして生きて来た英雄先生が、これ程慕った小太郎も傑出した人物であつたし、小太郎の信じきった英雄先生もすぐれた人でありました。豊田英雄先生は昭和十六年十二月一日、九十七歳をもって世を去りました。

(茨城・栄光幼稚園)